北小渕の大明神社について

吉田　光良 調

北小渕南町内にある元村社「大明神社（だいみょうじんしゃ）」は北小渕字南切（みなみぎり）1356 にあり、曹洞宗全久寺（ぜんきゅうじ）に隣接している。特徴の一つは東向きの神社ということであり、神社を１５０メートルほどやや下って東に行くと新般若用水に突き当たる。千秋の養鶏団地東から西南方向に流れてきた新般若用水は、ここで川幅を広げ、南の丹陽町三ツ井に向かって流れている。一帯は水田が開けており、この辺りの集落は大明神社とともに比較的早い時期から発展してきたのではないかと考えられる。

創建・・・１３９９年（応永６年）８月（神社台帳による）

祭神・・・「天火明命」（あめのほあかりのみこと）（真清田神社と同じ）

氏子・・・吉田姓・真野姓の氏子が多い

「新選姓氏録」や「大日本史氏族編」によれば、その昔第 5 代孝昭（こうしょう）天皇の皇子「天足彦国押人命」（あめのたらしひこくにおしひと＝市内島村の「若栗神社」の祭神）は、皇位を御弟君に譲り、自ら尾張平野に留まり、この地を開拓して文化を奨導し東国鎮定の重任にあたられたと伝えられている。そのため当地の吉田・真野両氏の者たちが、命の母方である尾張氏の遠祖「天火明命」（あめのほあかり）を氏神として奉祀したと伝えられている。

因みに、昭和初期の氏子 76 戸のうち 73 戸までが「吉田」・「真野」の姓である。氏神と氏子の関係がこのように明白に一系を成しているのはあまり例がなく、皇国敬神思想上まさに典型的なものと思われる。従って、神社台帳では当社の創立を応永 6 年（1399 年）と記述しているが、実際にはもっと以前ではないかと考えられる。

境内面積・・・社域は約２反部余。その後、土地の寄進があり拡張されている。

建造物・・・太平洋戦争末期の昭和 20 年 7 月 13 日の夜半、米軍の空襲による焼夷弾を受け、社務所を除き隣接する「全久寺」とともに全焼した。真清田神社と深い関係があることから、その後一時真清田神社の旧社殿をいただき設置していたが、氏子の努力によりいち早く再建が行われた。現在は神社としての建造物はすべて整っている。

なお、焼失前には「お鍬(くわ)祭り」のご神体と称する天然木製の「木鍬」や立派な「山車」が社庫に格納されていたが、戦争火災で焼失したと言われている。

樹木・・・境内には大きな楠の木が何本もある。台風等の心配から時々伐採をして建造物への影響を防いでいる。また以前「市の樹木」とされていた「くろがねもち」の木は胸高直径＝約 2.7mあり、西成地区屈指の大木である。

祭礼・・・例祭は毎年 10 月の第 2 日曜日。そのほか、7 月 15 日・8 月 15 日の 2 回昔ながらの素朴な赤い提灯にろうそくで火を灯し、境内に飾り付ける「提灯祭り」が今日まで受け継がれている。

なお、「大明神社」と同名の神社は、一宮市内起と江南市宮田町にある。

・一宮市起起字堤町 183（木曽川左岸道路添い「濃尾大橋」南・美濃路横）

・江南市宮田神明町春日 3（木曽川左岸道路添い「青木川排水機場」横）

・江南市宮田町藤ノ森 96（木曽川左岸道路添い「宮田用水中央管理所」横）

・参考図書「一宮市史西成編」等